ありがとう 新藤監督

名誉市民 新藤兼人さんご逝去

本市の名誉市民であり、国内で最高齢の現役映画監督であった新藤兼人さんが、5月29日にご逝去されました。百歳でした。

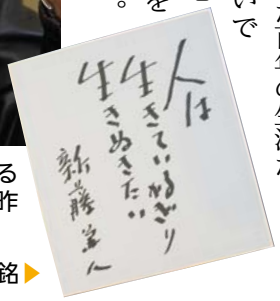
新藤さんは、昭和26年にデビューし、昨年までに49作品を製作しました。このうちの4作品は、本市で撮影が行われました。とりわけ、昭和35年に製作した「裸の島」では、佐木島の沖合いにある宿祢島（すくねじま）を舞台とし、佐木島で合宿をしながら撮影が行われました。この「裸の島」は、翌36年、モスクワ国際映画祭で最高賞を受賞しました。

平成14年には、文化勲章を受章し、同15年には、本市の名誉市民に選ばれました。

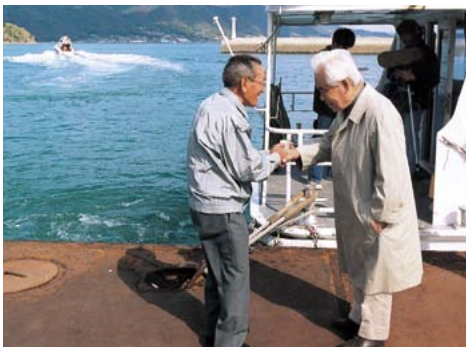
晩年は、「生きているかぎり生きぬきたい」を座右の銘とし、監督人生最後の映画「一枚のハガキ」を99歳で製作しました。この映画においても、主人公を佐木島の出身という設定にするとともに、筆影山から撮影した瀬戸内の景色を使用するなど、三原市に対する思いの強さを感じ取ることができます。

映画製作に人生の全てを捧げ、まさに、生きぬいた百年の生涯だったのではないでしょうか。心からご冥福をお祈りします。

▲広報みはらのインタビューに答え、尽きることのない映画への情熱を語る新藤さん（昨年5月19日に撮影）



直筆の座右の銘▶



▲平成14年、文化勲章の受章報告で佐木島を訪問。「裸の島」のロケに協力した堀本茂行さんと握手を交わす

▲平成15年に開催した新藤兼人ウィークであいさつをする新藤兼人さん（左）。孫の風さん（中）、次男の次郎さんとともに

▲左のイベント終了後、筆影山からの眺望を楽しむ3人

写真（3枚）提供：中野義孝さん

広報みはらでは、昨年12月号で新藤さんの特集を行いました。そのときに紹介できなかったエピソードなどを掲載します。

三原の海に眠る乙羽さん

新藤さんの妻で女優の乙羽信子さんが、平成6年に亡くなりました。その4、5年後、新藤さんは、親族3人で三原を訪れ、宿祢島の沖で散骨をしました。

最後は三原の地へ

先月3日、東京都内で新藤さんの葬儀がしめやかに営まれました。祭壇は、遺族の意向から宿祢島をイメージして形作られたそうです。そして、新藤さんの骨の一部も、この三原の地での散骨が検討されています。

新藤さん、安らかに

何年たっても、三原市が関わった映画は残り続けます。

そして、最後まで新藤さんの映画に携わった私たちのまち三原。

人の心を強く動かすことができる力が、この三原市にはあるということを教えてくれました。

新藤さん、お疲れ様でした。